

オンライン時代における

中国の大学の思想政治教育課の課題と可能性

張 放

(訳) 白美蘭

監訳) 高明潔



はじめに

中国のすべての大学は一九五〇年代初期より、「思想政治教育教育課」(以下「思政課」と記す)という共通科目を設置し、現在に至っている。思想政治教育は中国共産党(以下「中共」と記す)が主導する革命や国家建設が成功を収める最も重要な要因の一つであるとされている¹⁾。そのため、中共は政権成立後、大学に「思政課」を設置し、関連科目を一貫して開講²⁾することで、望ましい目標を達成しようとしている。これまで、国際社会では、中国の大学の思

政課に関して、思政課は中共側のイデオロギーを教え込むための手段でしかない、といった批判的な見方が多かった³⁾。たとえば、思政課のような教育プログラムに「制学術自由」(学術の自由を抑圧する)、「扼殺思想」(思想を圧殺する)、「洗脳」などのレッテルを貼るような見方が主流である。なかには、多元的な見方によって「思政課」を評価する声もあるものの、外部社会の価値観や優越感を盛り込んでおり、流動状態にある中国社会の変化につながる思政課の変化や内容構成を貶める側面もある。この影響を受け、中国国内の関連研究を行う研究者においても、大学に思政課を設置する必要性に関する討議や考察が停滞す

るようになっていく。

また、グローバル化でインターネットと情報伝達技術が飛躍的に進むオンライン時代において、中国社会に現れている多様な変化について、これまでである程度進んでいる大学の思政課の必要性に関する空理空論および、イデオロギーの立場を表明しただけの非学術化の傾向に歯止めをかけるため、思政課の必要性和中国社会の変化とを結びつけたうえでの考察が必要であり、また、内側の視点で思政課に関する考察を社会科学体系において行うことを可能にし、国際レベルの学際的な討議の機会を得たうえで、思政課に関する外部社会の固定観念による評価を是正することも可能であろう、と筆者は考える。

現在、中国の大学における従来型の思政課は、カリキュラム上では、オンラインで得た多元的な内容を次第に取り入れている。これに対して関連分野には、楽観的な姿勢を持つ担当者、多元的な内容と従来のカリキュラムとの間に生じたギャップに対する悲観的な態度、または抵抗感を持ち躊躇する担当者が併存している。それに、学生の間に見られた多元的な価値観を加えると、実際のところ思政課は周縁化しつつある状態にある。

この背景をもとに、本稿では、内側の視点に基づいて、中共が主導する思政課に対するイデオロギー上の偏見や批判を超えて、大学で思想政治教育を充足させる執政党であ

る中共側の出発点を背景として、オンライン時代における思政課に対する大学生の反響やマルチメディア時代の中国青年の動向、また、思想政治教育の苦境を乗り越えるため、中共の指導層が取った対策と思政課担当者側の実践や考えを提示する。そのうえでマルチメディア時代における大学の思政課の課題と持続可能な側面を検証する。

本稿で使用されている「青年学生」「青年世代」「青年層グループ」などの言葉は、主に一八歳から二五歳までの大学生を指すが、具体的な内容を挙げる際には、一九八〇年代以降生まれの青年層も含めている。

一 中国の大学の思想政治教育の背景

現代中国はなぜ、思政課を大学の教育プログラムの一つとして設置しているのか、その必要性はどのようなものであるのか。これを前提として、思政課を設ける出発点を次に説明する。

中国の大学の思政課は主として、中共の政治理念、中国現代史、中共の歴史と現代中国建設の道程、マルクス主義、そして道徳教育といった科目からなっている。それと同時に、時代の変化につれて科目内容も変化している。例えば、現行の思政課科目は、二〇〇五年より国家教育委員会が掲げた「05方案」により編成されたものである。本案

は、従来の「マルクス主義基本原理」「中国近現代史綱要」「思想道德修養と法律基礎」をはじめ、「毛沢東思想、鄧小平理論と」三つの代表「重要思想概論」(その後、「毛沢東思想と中国の特色ある社会主義理論体系の概論」に変更)という新しい内容を付け加えており、全四科目からなっている。四科目の分類は現在も継続されている。

思政課の必要性はその出発点と関係する。ここでは出発点を次のように簡略にまとめてみる。中共の初期において毛沢東は、革命を成功させるのに最も重要な戦力は人間の力と人の心であると主張した。彼は、軍事力や経済力と比べ、人間の力こそ社会を前進させる真の原動力であると言っている。「軍事力と経済力は人間によって左右される」からであるという主旨を強調している。つまり、軍事分野と経済分野においては先進的な物理的力を備えたとしても、その利点は一時的で、長期的にはそれらが消費されていく結果、消滅してしまうが、その反面、人間の力は流動的であり容易になくなるものではない、ということである。さらに、「人」の数だけでは力の強弱を決めることができず、力の強弱を決める決定的な要因は人の心であると強調した。毛沢東は、近代初期の散らばった砂のような中国人の実態を痛感し、中国社会の結束力の欠如を改善するためには、内在する精神的な形成を通してのみ戦闘力とまとまりのある全体になることができ、そのうえで人の数の利点を

最大化することができるとしていた。「人間の心」こそが「人間」が力を生み出す鍵であり、人間の力を結束した思想は「人心斉」という、一人ひとりの個体が共通の認識を持ち中華民族という共同体を形成することができると強調した。

この毛沢東の主張は、後の「自由で平等な新中国」を作り上げ、「世界の永遠の平和」に貢献するためには、中国人は精神面で共通の意識を持つてはじめて中国の主体性を示すことが可能になる、という中共側の理念として一貫していた。この理念は、建国後の中共が主導してきた社会全体における思想政治教育の出発点であり、大学に思政課教育プログラムを設置してきた主な背景である。

新中国成立直前に、中国の大学で教鞭を執っていた知識人のなかには、当時、国共内戦がまだ続いており、生産力も低い中国社会自身のみで新中国を建設することができるとかどうか、という懐疑的な態度を持つものもいた。一九四九年五月下旬、南京市党委員会書記の陳修良氏は中国共産党中央委員会と華東局への報告書で、当時の知識人の状態を次のように記している。「いわゆる民主主義者(編者注：当時の大学教師を含めた学者のこと)は、実際には中道右派の人々であり、親米派の学者である。彼らは、我々が権力の座につくことで腐敗してしまうのではないかと疑問を持っている。彼らは我々に彼らの地位の保証と

「完全な民主自由」を求めている。そして、彼らは我々にアメリカに留学している留学生を呼び戻し、科学技術分野の教育をリードするようにと申し立てる。これは実際には、新中国の建設を彼ら（アメリカ留学者）に委ねたうえで、我々に米国からの援助を受けさせようということにほかならない」。

一九四〇年代、民国政府の首都である南京には知識人が集中していたため、この報告書に記されている知識人層の申し立てには非常に代表性がある。これに照らして毛沢東は知識人の思想的転換の難しさ、同時にその重要性を十分に検討して、知識人における新中国を建設するプロセスで、西洋に感謝し、西洋を崇拜し、西洋に畏敬の念を抱く傾向が、一旦中国の「土」（学者）階層で広がってしまうと、これまで中共が追求してきた中華民族共同体の主体意識の建設も話にならない恐れがある、と認識した。そして、知識人と青年学生の雑念を追い払うためには、大学で中共が主導する思想政治教育という思政課を設定する必要があると決め、その目標は、新中国を建設する自信がある、欧米社会と異なる中国独自の主体性を確立することである。多くのオプザーバーは、中国の思政課の目的は、外国の経験を排除し、教育を受けた対象者に外の世界を理解する環境を失わせ、一国主義的な教育システムに留まらせることであると考察している。しかし、実際、一九五六年、毛

沢東は新しい中国を建設するにあたって、海外の経験を学ぶことと中国独自の道のりを探索することとの関係について、次のように表明している。

「世界の文明は単一ではなく多様であるので、外国の法や経験を学ぶことは中国のものを改良・発展させ、中国独自の新しいものを創り出すためである」、（外国の方法や経験を学ぶことは）「中国をより一層中国らしく建設すべきであり、中国を益々西洋化していくものではない」。また、「外国を研究する過程で、私たち（中共）は独断主義と保守主義の両方に反対しなければならない」という。当時の外国の方法や経験を学ぶことに対して党内に現れた誤解を解くため、毛沢東は、「欧米先進国のいいユニークなところを学ぶことは、中国のスタイルで中国独自のものを創り出すためであり、この方法でのみ、国民の民族的自信を失わないのである」と表明している。

このように、中国の大学で思政課を設置するのは、青年学生に排外主義的な思想を形成させ、独立して探求する能力を失わせ、「操り人形」にすることではなく、青年学生を新しい中国の建設に貢献できる人材として、または中国の主体性を確立する基盤として育成するための措置であった。このような目的で設置した思政課は、当初から中国の国情に適合して設けられた社会科学の科目であるといえる。実際、これまでの大学の思政課の科目は、文革期を除

き、一定の内容には長い歴史を誇る中国の経験をはじめ、外の世界の経験との比較を加えたうえで、中国社会の発展過程に抱える課題を分析する内容も取り込んできている。

一九九〇年代以降のグローバル化の進展に伴い、国際社会における中国の影響力が拡大し続けるなか、中国への批判があるにもかかわらず、現代社会の重要な組成者の大国である中国の存在を無視することはもはやできない。そのなかで、中国の高等教育制度においても「与时俱進」（時代の流れとともに進んでいく）、「取長補短」（長所を取り入れて短所を補う）という趣旨の改革を推進している。とくに、思政課の場合も、不確実性や多様化を含める膨大な情報が流れるマルチメディア時代において、多くの課題を抱えながらも改革の可能性を模索するようになっていく。

二 オンライン時代における 思政課の課題と改革の可能性

オンライン時代において、中国では情報入手する手段や媒体の在り方の多様化は予想以上であり、大学の思政課にも不可避の影響を及ぼしている。従来型の思政課は、それらの影響とどう向き合うべきかという課題を抱えながら、マルチメディアに提供される情報を思政課に取り入れ、思政課の目的に適合するような改革を試みる実践も現

れている。

オンライン時代以前では、従来型の思政課は指定された教科書、参考図書、マルクス主義の古典選書、中共党史書、公式メディアなどを基に行っていた。そのため、学生側も担当者側も共通のコンテンツを通して同じ立場に立ち、思政課の安定を保っており、コンテンツ以外の情報を用いて思政課に不安定な要素を持ち込む状況はほとんどなかった。しかしながら、現在では、オンラインの世界に流れている膨大な情報量は、従来型の思政課の基本的なコンテンツストメニューに影響を与えつつあり、担当者側も学生側も各自が得た多様な価値観を含めた情報により、従来型の思政課は新しい息吹にも触れるようになっていく。このため、現在、マルチメディアの影響を受け従来型の思政課の教授内容や方法も変革を迫られており、多くの課題を抱えている。

現在、他の教科と比べて、思政課が抱えている最も大きな課題は、従来型の思政課の価値理論や内容ではもはや学生のニーズを満たすことはできないことである。これまでに、中国の大学では、教室という物理的な空間においては教師の威信には挑むことが許されず、学生は受け身で教わるしかなかった。ただし、現在では、大量な情報を得た学生側は、それら情報を以って思政課の内容を検証したり、教壇に立つ教師の教えに質疑したり、自分の見解を述べた

りすることができ、また、一定の話題をめぐって発表した
り討議したりすることもできる。担当者も学生側の視点と
新しい情報とを合わせて検証したり、新しい見解を示した
りしている。このような学生と担当者間にある知的な関係
を対等的に転換させたことを、中国では「反転授業」とい
う。「反転授業」は従来型の教師と学生間の序列を解体す
るように見えるが、学生を独自の思索の精神を持って積極
的に授業に参加させる¹⁰⁾励みでもあり、現在、中国の教育界
で人気を集めている。

こうした「反転授業」は思政課の可能性を示すものであ
る。思政課における「反転授業」は、オンラインで多様な
トピックを把握する学生側が、それらを講義時間帯でア
ピールすることができる。それに対し、教師側は専門的な
見識によってそれらトピックを分析し、学生の思考力に刺
激を与える。このような相互刺激のもとで、学生の受動的
学習は能動的学習に変わりつつあり、思政課に対する「宣
伝と教化」という固定イメージも改善できており、思政課
に新しい可能性をもたらしている。

このような過程で表れた一方向の伝達から双方向のイン
タラクティブなプロセスへの転換は、思政課担当者により
高いレベルも求められるからである。これは思政課の可能
性につながるものである。かつてのような一定の内容を重
んじて繰り返させる従来型の思政課の内容は、現在、決ま

り文句に過ぎず、知的な魅力がないものとして学生にク
レームを付けられており、これは大学の思政課が次第に周
縁化される境地に立たされる現実である。そのため、担当
者がより新しい視点や知的な情報を吸収しなければ、より
多様な方法で生徒へのフィードバックに注意を払わなけれ
ば、ますます多様化する学生側のニーズを満足させること
はできない。このため、思政課のコンテンツをニューを
より豊富にさせるため、担当者側が取り入れた新しい内容
や講じた新しい教授法も、実際、オンライン時代が思政課
に与えた新しい可能性にほかならないと筆者は考える。

ここでいう新しい可能性とは、筆者自身の経験も踏まえ
て言うところの通りである。まず、オンラインが提供する多
様な情報の中には、思政課にとつてより豊富なコンテンツ
や新しい視点も含まれている。従来型の思政課は、担当者
は主に決まった内容に基づき講義してきており、自分自身
の独自の考えを主題として、また、新しい方法で思政課を
進めるための余裕がなかった。現在では、担当者が公式サ
イトまたはプラットフォームに流れているデータや事例を含
む情報を取捨した教授内容、また、ドキュメンタリーや
オーディオなどのリアルな教材の使用は、最も学生のニー
ズを満たせるものである¹¹⁾。このような思政課における担当
者と学生の接近法は、思政課の改革や可能性を示す一例で
ある。

筆者は、ハイテク開発を伴うマルチメディアは、思政課にプラスとマイナスの影響を与えていることを認めており、従来型の思政課は課題を抱えていることも否定しない。しかしそれと同時に、前述したように、筆者が最も重視したのは、マルチメディアが従来型の思政課に与えている新しい可能性である。つまり、マルチメディア時代の担当者と学生の間、知的な関係における対等性や多様化こそが、思政課の内容をより充実させる重要な資源であり、思政課の可能性を呈する背景でもある、ということである。しかしながら、それと同時に、現段階では、筆者のように思政課に対して楽観と悲観の両方の思いを混在させている者は少なくない。それは中国の青年層グループの分化によるものである。

三 オンライン時代における 中国青年世代の価値観の多様化

楽観的な立場に立つ背景の一つは次の通りである。

二〇二〇年五月四日の「中国青年節」という青年の日、若年層世代の人気を集めている「哔哩哔哩」(bilibili、中国の動画共有サイト、別名は「B站」という有名なビデオウェブサイトが公開した『後浪』¹⁵⁾という名前の短編ドキュメンタリーを例として挙げてみたい。この短編が公開

された後、他メディアからの転載を除く、B站だけの累計放送回数が三二〇〇万回を超え、六万六〇〇〇件以上のコメントが寄せられ、当時広く注目を集める文化的現象となった。二〇二〇年一月二月、『後浪』というタイトルは中国の雑誌『咬文嚼字』の編集部にその年の人気用語のトップ10にランク付けられ、その影響力を十分に示した。

『後浪』の監督は中国の青年世代を総合的に高く評価する立場でこの短編を制作した。すなわち短編は、一九八〇年代以降に生まれた青年世代が、良い教育を受け、国際的なビジョンとマインドを持ち、独立精神、オープンマインド、大胆な思考力と行動力を持ち、前世代の人々にはかなわない高みに立っていると評価した。しかしながら、この短編はネット上で激しい論争を引き起こした。論点は『後浪』に映される青年らの姿は中国の青年世代の現実を代表することができるかどうか、という点である。

批判的な見方を集約すると、次のようである。『後浪』の登場人物に当てはまる青年はごく一部の少数派で、中小都市や村に暮らしている大部分の青年は、生活が豊かではなく、教育資源が不足していて、その一部は教育を続けることすらできず、世の中をさすらいさまよって、消費時代で欲求を刺激される一方で、苦しい現実には屈服するしかほかはなく、その日暮しをするようになっていく¹⁶⁾。すなわち、『後浪』に登場した青年らは、理想化されたもの

で、その多くは大中規模の都市で生まれ育ち、質の高い教育を受け続け、親と一緒に世界中を旅する中流階級出身者ばかりで、もちろん、広い視野を持つてはいるものの、中国の青年層を代表することはできないという⁽¹⁶⁾。また、大学に在学している、あるいは安定的な職に就いている青年世代の人もいるが、実際、彼らは上の世代の運命を変えるための負担も負わされているため、大学生活も日常生活もあらゆるプレッシャーを抱え、自分の力で生計を立てるしかないという⁽¹⁷⁾。

このような批判的な見方をする青年の数は膨大であり、彼らは『後浪』に登場する青年らの特徴を持っていないかった。さらに、エリート視点で制作された『後浪』に対し、それを揶揄する『或許、這才是大多数普通人的「後浪』』(これこそ、大多数の一般人の「後浪」かもしれない)というタイトルのドキュメンタリーも同じB站で公開された。この作品は出稼ぎの若者らの独白によってその現実をリアルに映し出した。公開された後、視聴数は五二〇万回に達し、二万二〇〇〇回以上のコメントが寄せられた⁽¹⁸⁾。

現在、中国では中国の青年世代に関する記述に「八〇後」という言葉がある。この言葉は、単に生まれ年の一九八〇年代をいうのではなく、マルチメディア時代が到来する前の情報源が比較的に一時的な時期に生まれ、また一定の社会的・経済的な特徴を共有する若い世代を象徴的に表

す言葉である。それに対し、情報源が豊富で多様化した一九九〇年代生まれの人々は「九〇後」と呼ばれ、二〇〇〇年以降生まれの人々は「〇〇後」と呼ばれている。

このような生まれた年代による青年世代の分け方は、関連する考察にある程度の時代的特徴を提示するが、しかしながら、前述した『後浪』に登場した青年たち、そして正反対の『或許、這才是大多数普通人的「後浪』』に映し出されている主人公は、生まれた年代によって分けられた青年ではなく、一九九〇年代以降に生まれた若者もいる。また、『後浪』を批判する人々にも一九九〇年代以降に生まれた若者も含まれている。

この事例から「八〇後」も「九〇後」も「〇〇後」も、まとめていうと、みな青年世代の者であるものの、環境も現実も一様なものではなく、価値観も多様である点は、現代中国の青年世代の社会階層を対象とした関連研究に新しい視点を提供するものである。なにより、それらによる『後浪』に関する論争や抵抗から、中国の青年世代は、前述したような「洗脳」された者か「扼殺思想」(思想を圧殺する)された者ではなく、マルチメディアの方法で自己意識を自由に発信することができるといえる。このことは、筆者のような楽観的な立場に立つ人々が存在する背景の一つである。

そして、悲観的な立場に立つ、または悲観的な思いを持

つ背景は次の通りである。

中国国内の一部の研究者は、青年世代の特徴について「インターネット時代の先住民」「天然の愛国者」「歴史に無関心」などを挙げている。¹⁹ また、青年世代の内面世界は虚無的、表面的、断片的だと特徴付ける研究者もいる。²⁰ このような表現は、ある程度青年世代の現状を反映しており、なかには非常に洞察に満ちた見方もある。しかしながら、青年層グループの現状を実証的に分析してみると、これらの見方は『後浪』のように中国の青年世代の普遍的な状態を表せるものではないかもしれない。本稿を執筆するにあたって北京や上海のような大都市の重点大学生を対象に調査したサンプルでは、回答内容がエリートとしての立場を自然に暴露している。これらの見方や回答は、もちろん、中国の青年層グループの実態を把握する補助線になるが、中国の青年層グループが持つ多様な価値観も、マルチメディア時代の青年学生にとつての思政課の現状を分析する補助線になる。

第一、教育領域の市場化に現れる青年層グループの功利主義の傾向からみる思政課の周縁化。この傾向は、八〇後、九〇後、〇〇後に大きな影響を及ぼしており、学生に自身の価値観の取捨選択を最大限に追求させ、学生同士間での競争も激しく繰り広げられている。一九九〇年代の終わりに進んだ、中国の高等教育分野の市場化は、アジ

アの金融危機や解雇騒動など複数の社会的危機に対処し、内需の拡大を実現する目的であった。高等教育の市場化とこののは、教育を受ける人が学業を修めるために高額の教育費を支払う必要があり、卒業後には就職市場に直面し、雇用主に選ばなければならないことを意味する。したがって、教育を受けるための教育費は、個人の教育への投資だけでなく、彼らが就職活動をする際にほかの就職者と競争できる条件を保証するものでもある。

したがって、大学が就職率を重要な評価指標および大学を宣伝する焦点にあてることが一般的になっている。教育投資の代償を回収するために、学生側は専門的なスキルの育成に全力を尽くす必要があり、大学は彼らが生存するための場となり、彼らの競争力を奮い立たせた。このような教育環境の変化により、学生は入学したその日から何をすべきかがわかるようになった。学生へのインタビューでは、入学オリエンテーションの時から、就職は最優先事項であることを大学側に指導され注意されてきたと明かした。就職市場での競争力を高めるために、学生は言語や技術を含む応用性の高い資格を取ることに熱中し、試験に備える準備にほとんどの時間を費やした。それに対し、応用性が低い思政課には目をくくれる余裕はなかった。

このような傾向は、学生個人の価値観の取捨選択に基づく現実に向けた応用性を重んじるものである。思政課が冷

遇された背景も文学、歴史、哲学などの人文系の科目が冷遇される理由と一致する²³⁾。また、こうした応用性を重んじる傾向は実際、基礎教育の分野にも広がっている。衡水第一中学校²⁴⁾のような外部の投資を受けて設けた教育機構は名門大学に進学することを唯一の目標とし、その目標を意図的に学生に植え付けた²⁵⁾。

第二、大学生における新しいタイプの歴史虚無主義的な傾向である。改革開放以来、中国社会には、中共が政権成立後に成し遂げたすべての成果および、中共が執政する正当性と合理性を否定しようということ、また、社会進化論と文明優劣論の観点から中国文明と中共の価値理念を解釈し、近代国家の本質を追求しようという傾向が現れている。この傾向は近代以降の中国と西洋のイデオロギー衝突の延長戦であると言える。現在、改革開放時期の歴史虚無主義の影響力が次第に弱まり、関連する言論も舞台を失ってきた。その一方、新しいタイプの歴史虚無主義が新世代の青年の間に現れている。

二一世紀の現在、中国経済の急速な発展における大規模なインフラ建設、地方政府政治力の強化、居住環境の改善や国民生活水準と生活満足度の向上などは、オンラインやマルチメディアを通じて国際社会に発信されるようになってきた。同時に、停滞する状態にある先進国の問題も同様に国際社会に広がっている。そこで、新世代の青年は中国の急

速な発展を自負して、欧米生まれの社会進化論と文明優劣論に挑戦するようになっていく。彼らは前述の『後浪』の主人公のように、中国を熱狂的に称賛し、冷静かつ客観的な視点で中国に対する批判を受け入れることなく、また、かつての中国の苦難に対する理解と敬意には欠如している。筆者の学生へのインタビューの中で、何人かの学生は中国の近代史は重すぎるので、その時代の歴史を勉強したくないといった。こうした彼らの傾向は、中国の苦難に満ちた歴史を無視し、現在の成功だけを肯定し、現在と過去を分離した歴史虚無主義であると言える。

第三、前記の二と関連して、自由主義の衰退と毛沢東ブームが現れている。自由主義は改革開放後に最も影響力のある思潮として、それ以降に高等教育を受けた数世代の知識人に影響を及ぼした²⁶⁾。しかし、近年ではこの思潮はとくに青年世代の間での影響力が弱まってきた。その背景の一つは、中国社会の発展モデルは普遍主義の理論体系や言説体系としてはまだまだ形成されていないが、中国の発展モデルはある程度、欧米が主導してきた社会発展に関する「代表的な話語権」（代表的な理論体系による言説）に衝撃を与えた。この「代表的な話語権」をめぐって中国の学界では、関連概念、理論、話語が生まれた歴史的背景をはじめ、時代的な変化につれてその意味合いを人類社会の歴史的な文脈において再議論している。このような動向は高等

教育を受けている青年学生にも影響を与え、一部の青年の見解の主流となっている。

例えば、一九八〇年代後半からネット上で西側先進国の強さと自由民主制度の優位性を大いに称賛し、マルチメディアで非常に活発に発信し影響力を持っていた自由主義者の有名人は、現在、青年層から批判されている。その有名人のコンテンツは彼らの想像によって織りあげられただけのもので、目的は民衆に向けて中国の体制と中共に疑問を投げかけるものだとして批判されている。また、新型コロナウイルス流行期における中国側のコロナ蔓延に対する攻防の実績によって、それらの言論は多くの青年ネチズン（「網民」）に抵抗された。こうして、一九八〇年代以降の自由主義の思潮の衰退に対し、近年、青年層グループには「毛沢東熱」と「社会主義熱」という動向が現れてきている。この動向は、改革開放から四〇年以上が経つ今、多くの外部観察者と研究者らを驚かせた。その背景は次のようである。

二〇二〇年に『後浪』という言葉と同時に人気のトップ10に選ばれた言葉に「打工人」（出稼ぎ労働者や雇用される者）という言葉がある。この言葉は手作業または技術労働に従事する人々、建設現場の労働者、オフィスで働くサラリーマン、さらには会社の中堅リーダー、起業家などすべてを網羅して用いられた言葉である。⁽²⁵⁾一時、「人可以一天不吃飯、但不能一天不打工」（人は一日食事を抜くこと

はできても、一日も働かずにはいられない）、「只要我够努力、老板一定会过上他想要的生活。早安打工人！」（私が一生懸命働いたら、ボスは必ず自分の望む人生を送ることができる。出稼ぎ労働者よ、おはよう！）、「打工可能会少活十年、不打工你一天也活不下去。下午好打工人」（働いたら命が十年間縮むかもしれないが、働かなければ一日も生きることができない。出稼ぎ労働者よ、こんにちは！）など、「打工人」に関連するフレーズがインターネット上に現れた。⁽²⁶⁾

これらのフレーズは出稼ぎ労働者や雇用される人々の、苦しいなかでありながら楽しみを求めざるを得ない無力感を明らかにしたが、明確なメッセージは、誰もが賃金稼ぎであり、資本によって搾取され、上司のためにお金を稼ぎ、生計を立てるために働くことが自らの運命であるということである。そこで「打工人」という言葉は、職場に入った「九〇後」においても、学校に通っていない「打工人」になる「〇〇後」においても、ソーシャルネットワーク上での自称として用いられている。それは「打工人」という言葉が、彼らの将来に対する不安な状態や資本家側に搾取される感覚をリアルに示しているからである。

改革開放後の四〇年間、中国における莫大な資本力は中国を大きく変化させた。人々の生活水準が全般的に向上すると同時に、貧富の差が次第に拡大し、それに基づいた社

会的階層も固定してしまい、一般の人々の社会移動の可能性も一定化されるようになった。この現実⁽²⁾に直面している青年層グループにとって、頑張れば運命が変わるという彼らの理想と野心は挫折を味わうばかりである。特に、近年のデジタル経済の急成長は、青年層グループにとって、平等なデジタルユートピア時代をもたらせなかっただけでなく、これまで以上に資本力と統合し、日に日に進化する技術手段を通じて、個人への搾取と支配を強化するものにはかならなかつた⁽³⁾という。

こうして、搾取される感覚と無力感を痛感する青年層は、過去に触れた搾取階級を革命の対象とした毛沢東の思想や魯迅の唱えを振り返って「今この時があの日あの時（と一緒）だとタイムトラベルをした気分になった。彼らは過去の時代を描いた文章から現在の自分自身の境遇を読み取り、その時代を批判する鋭い表現は、彼らに快感を覚えさせたり、慰めたりするだけではなく、新しい出口を探す方法とアイデアにもなった。これは最近『毛沢東選集』が若者の人気を集める背景である。彼らは毛沢東時代の理念や実践を歴史的遺産として、それを以って現在の中国の状況を見つめて、国際社会との比較によって中国の現状を分析しようとする。

こうした多様な価値観を持つ青年層グループに現れる傾向に対して、楽観的悲観的な立場をあわせもつ大学の思政

課担当者の現状はどうなっているのだろうか。

四 大学の思政課担当者の現状

大学生をはじめ青年層グループの価値観の多様化に対して、実際、思政課担当者の反応は遅れている状態にある。「思政課の教師はどのように対応すべきか」という議論も行われていたが、社会科学体系による方法論的な議論は展開されず、表面的な議論に留まっている。筆者の抱く「大学の思政課の担当者は、マルチメディア時代での自分の立場をどのように理解しているか?」「思政課に対する学生の関心度を把握しているか?」という質問に対して、未だに説得力のある答えを得たことはない。その反面、大学の思政課担当者は中共の意志を伝える担い手の集まりという見方は、まだまだ根強く一般化されている。

実際、ほかの社会科学科目の担当者と同様に、思政課の担当者は宣教師ではなく、人に操作されるロボットでもなく、人生で多くの困惑に直面している普通の人間である。とくに、思政課が抱えている課題は思政課の担当者自身の課題でもある。それらの課題を大学に思政課を設ける文脈において説明してみよう。建国初期から現在に至るまで、中国の大学は「又紅又專」の人材を育成することを目標としてきている。マルクス主義的な世界観を確立させること

を「紅」といい、各分野の専門知識を備えることを「専」という。「紅」のような教育内容を担保したのは思政課担当者であった。毛沢東時代では、大学教育のカリキュラムにおいて、思政課の科目を設置した学部は中核的な学部でなくても、周縁的な学部でもなかった。また、「紅專併挙」（紅專の両方を重視する）のような人材を育成するために、担当者らは自分たちの役割に対する認識と思政課の教育理念を合致させて教育に専念してきた⁽²⁹⁾、という。

ただし、新中国以降の歴史において、時代の変化の影響で、「紅」の教育内容は「専」よりも幾度かの変化があった。思政課内容の変化が起きたのは改革開放後の最初の二〇年間であった。その変化を起こした背景は次のようである。

第一、各分野では欧米、特に米国生まれの知識体系を導入し始め、大学や研究機関の許可を得た関係者は次々と欧米に赴き、先進的だと思われる教育体系や管理体制について見学した。大学や研究機関も海外の名門大学との間に協定を結び関係を築いた⁽³⁰⁾。多くの人が欧米諸国に留学し、相手の国の教授や学生も中国を訪問し交流を交わすことができた。その結果、欧米側の学術界の著書が大量に中国語に翻訳され、中国で出版されたが、供給不足であった。このような背景はこの時期の思政課にも影響を与えた。

第二、改革開放の初期段階では中共の理念や歴史を賞賛する声は主流ではなく、この傾向は教育領域にも広がって

いた。また前述のように⁽³¹⁾、大学では受け入れ学生数の枠を増やし、授業料を引き上げるなど、教育が市場化されつつあった時期においては、学生の出口は市場に任せられたため、高所得産業への就職につながる専門への進学は学生が目指す目標となり、応用性のない人文社会系の専門は捨てるには惜しい「鶏肋」と見なされ、多くの学生に敬遠されるようになった。

この時期から思政課が動揺し始めた。もちろん大学側はこれまで通りに思政課を重視していたが、その一方、前述したように教育領域の市場化、そして青年側の実用主義の台頭やマルチメディアの影響により、多くの大学に設けられているマルクス・レーニン主義の教育研究部門はあってもなくてもよい、というような周縁的な境地に陥った。そこで思政課担当者の位置づけも次第に曖昧になった。思政課は時代遅れのコンテンツであり、担当者も人文社会科学的な知識が欠けており、中共のイデオロギーを伝える頑固で人情味のない道具だと見なされることも一般的である。人気のフリーズの「馬列主義老太太」（マルクス・レーニン主義の老婦人）のような言葉は思政課担当者のイメージを揶揄する代名詞であった。

実際、「馬列主義老太太」と呼ばれる世代の思政課担当者の中には、四〇年代から五〇年代に高等教育を受けた人も多かった。その時代は欧米の知識体系を最も重視し、自

由主義の思潮が最も人気があった時期であったため、彼らは思政課の内容にも欧米側の思潮を取り入れた。当時、その姿勢は大学生や大学側に賞賛され尊敬されたため、思政課は独自のバリエーションプロポジションを実現した。二〇世紀の後半から二一世紀の初期にかけて、大学や大学院の受験科目には政治は必須科目として設けられた。そのため、一時、個別指導塾では思政課担当者は非常に人気があり、市場シェアをめぐる競争により流血事件すらも起こった。

それらとは異なつて、改革開放世代の思政課担当者は、現在では、上級の肩書や指導者の地位を得て、一定の影響力和発言権を持つてフォーラムで活躍しており、彼らは高等教育を受ける過程で欧米側のリベラルな影響を深く受けているものの、実用主義と功利主義の立場に立つ者もいる。そのうちの一部は「周辺人」という心理状態にある。また、彼らは一九九〇年代以降に生まれた大学生の価値観上の変化に対する関心が足りない。このような特徴を有する改革開放世代の思政課担当者や学生との間にギャップが現れている。このギャップは当面、中国の大学の思政課が直面している現状である。

このように、当面、担当者の中には学生の価値志向を理解し、従来型の方法を採用し続けながら、非思政課さらには反思思政課の内容をも取り入れるように試みる傾向も現れる。それと同時に、学生の変化を無視し、また二一世紀現

在の中国社会の変化や現実から逸脱したように改革開放初期の自由主義の思潮を空論し続ける傾向もある。他にも、生徒が何を求めるかを理解しようとしないうちに、「いいかげんに日を過ごす」という姿勢を示す担当者もいる。このような現実は、現在、従来型の思政課に多くの課題を抱かせる背景である。

五 思政課を推進するために 政府側が講じた措置

オンライン化が中国の従来型の思政課に課題もたらしたことは否定できない。最も大きな課題は、中共が主導する新民主主義革命と社会主義建設のプロセスで提唱していた「人心斉」に基づく中国の主体意識の分裂である。主体意識論に関しては、竹内好氏の『方法としてのアジア』では、方法論の意味での「アジア」とは、地理的や物理的概念からのものだけでなく、主体形成の過程に焦点を当てているものであり、また「毛沢東の根拠地の実践で提唱した「独立自主」と「自力更生」は中国の内部構造に基づいた主体性の構築であり、自己基盤に固執する革命の形態である」と指摘している。

このような中国本土の現実に照らして形成された中国の主体性は、改革開放後、外国側の諸意識や価値観と激しく

ぶつかり合った。オンラインで中共の歴史と中国の発展を完全に否定する声が広がるようになっており、具体的な出来事から全体を否定するだけでなく、中国の歴史からかけ離れた中国の主体性意識の形成に関する認識にも影響を与えている。近年、党の指導部は、それらの影響および表面化されていない潜在的な抵抗に対し、特に大学の思政課を全面的に改進するため、次のような措置を講じている。

第一、思政課のカリキュラムの内容を総合的に構成させること。教育部は「経済のグローバル化が深まり、情報ネットワーク技術が飛躍的に進歩し、さまざまな思想、文化の交流がより頻繁になるため、学生の成長環境が大きく変化しており、それらの思想認識はより多様化するような特徴も鮮明になってきた」と認識している⁽³⁵⁾。そこで、思政課の内容と各分野間との調整、思政課における人文社会科学の視点を十分に生かす必要があると考案している。具体的には、「全科育人」（すべての科目との間での調整）、「全課程育人」（学生が在学期間中の思想教育を徹底すること）、「全員育人」（家庭、学校、政府、社会との協力による思想教育）という思政課のカリキュラムを構築し、そして、「青年学生を、高潔な道徳的情操、確固たる科学的および文化的資質、健康な体と心、優れた美的センスおよび中華文化に深い造詣を持ち、中国の特色ある社会主義の共同理想、国際的な視点をもち、社会主義の建設に適合する者と

信頼できる後継者として育てる」⁽³⁶⁾ことを目指すとしている。このように、以前から中共が主導してきた思政課は、これまでのように中国の主体意識を重視してきたイデオロギーに拘束されず、中国の主体意識と国際的な視野を合わせたうえでオープンマインドな人文社会科学として樹立し、それにより学生の質を全面的に向上させることを目指すようになっていく。

第二、教授法の改善を提唱する。先にオンライン時代が従来型の思政課に与える衝撃に触れたが、思政課に対する誤解を解くためには、内容の改善だけではなく、担当者と学生間の相互作用を重視する教授法の改善も必須条件としている⁽³⁷⁾。そこで、教室での教育と日常の実践的な教育活動を組み合わせる方法を取り入れるべきと提案されており、指導的地位にある幹部により教授法を促進させる方法も講じている⁽³⁸⁾。その理由は、幹部ら自身の実践的な経験は理論から理論への枠組みを超えて、実践者の観点で学生に中国社会を理解させ、根拠のない非現実的な考え方を回避させる説得力があるからである、という。

第三、思政課担当者のチームビルディングの建設を強化すること。教育部が思政課担当者を養成する計画には、中堅教員の養成、在職中の上位学位の取得、全員の国内外研修などが含まれる。五年以内に六二〇〇〇六七〇〇人の思政課担当者を育成する予定であり、さらに、青壮年の中堅

担当者の教育研究を支援し、出版資金を提供することなども決められている。また担当者の綿密かつ地道な調査結果を教育内容に取り入れさせるような思政課の教育法を奨励している。習近平は二〇一九年三月一八日の学校の思政課担当者のフォーラムで、担当者は強い政治、深い感情、新しい思考、広い視野、厳格な自己規律、正直な人格などの素質を持つべきだと指示した。

以上の三点は、現在、中共指導部がオンライン時代における大学の思政課が抱える課題を把握し、そのうえで改善策を講じている動向を示すものである。そのなかでは、オンライン時代の思政課は従来型の思政課における中国人の主体意識を養う路線から逸脱させることはなく、海外研修を奨励する提案から、その路線にグローバルな意識を取り入れる要素も示されている。しかしながら現実には、このような新型の思政課を実現するには多くの障壁がある。一つ目は、思政課担当者の思政課を改善する必要性に対する認識は統一されていない。二つ目は、教育部による思政課と担当者に関する提案は、他の人文社会専攻との間に潜在的な亀裂と対立を表面化させる可能性もある。

終わりに

中国の大学の思政課のような教育プログラムの存在は、

外部社会からの理解を得難いものなので、つねに批判されており、また誤解を招いている。内側の立場に立って言わせると、オンライン時代になっている現在、中国の大学の従来型の思政課にも多様な価値認識を取り入れる実践や指導部の提案から、中国人の主体意識の育成を重視しながら、外部社会の視点や青年層グループに現れる多元的な価値観を排斥する意図はないことがわかる。また、中共が主導する思想政治教育のような現象は後発開発途上国にも普遍的に存在する。

同時に、オンライン時代において思政課が苦境に直面していることも否定できない。この苦境は、オンラインによる多元的な情報と一元的な情報の間のギャップである。そのようなギャップを埋めて思政課を保全するためには、担当者側と青年学生との間の歩調をそろえることが必要であり、思政課を学科としてレベルアップする担当者側もさまざまな試練を受けなければならないと考える。

注

〔1〕 黄小蕙・郭景輝・李玉堂主編『思想政治工作七〇年』

北京：国防大学出版社、一九九一年、王樹蔭編『中国共産

党思想政治教育史』北京：中国人民大学、二〇一一年、王

茂勝・張燿燦『中国共産党思想政治教育簡史』武漢：華中

師範大学出版社、二〇一〇年参照。

〈2〉 教育部思想政治工作司編『加強和改进大学生思想政治
教育重要文献選編（一九七八—二〇一四）』北京：知識產
權出版社、二〇一五年、馮剛編『改革開放四〇年高校思想
政治教育編年史（一九七八—二〇一八）』北京：北京師範
大学出版社、二〇一九年参照。

〈3〉 Robert Jay Lifton, *Thought Reform and the Psychology of
Totalism: A Study of "Brainwashing" in China*, Chapel Hill and
London: The University of North Carolina Press, 1989.

〈4〉 中国共産党第一三期中央委員会第四回全体会議（一九
八九年六月二三、二四両日、北京で開催Ⅱ四中全会）以
降、江沢民を主な代表とする中国共産党は、中国の特色あ
る社会主義建設の実践を通じて、何が社会主義であり、ど
のように社会主義を建設し、どのような党を建設するか、ど
のように党を建設するかという認識を深め、党を治め国
を治める新たな貴重な経験を積み、それらを「三つの代
表」の重要思想にまとめた。具体的には次の通り。中国共
産党は、①中国の先進的生産力発展を終始代表しなければ
ならない、②中国の先進文化の前進方向を代表しなければ
ならない、③中国の最も広範な人民の根本利益を代表しな
ければならない。

〈5〉 『毛沢東選集』第二卷、人民出版社、一九九一年、四六九
頁。

〈6〉 『毛沢東選集』第二卷、人民出版社、一九九一年、四七六
頁。

〈7〉 「南京市委向中央及華東局五月份綜合報告」（一九四九
年五月二三日）、『陳修良工作筆記：一九四五—一九五一』
東方出版中心、二〇一五年、六三頁。

〈8〉 『毛沢東文集』第七卷、人民出版社、一九九九年、八二頁。

〈9〉 『毛沢東文集』第七卷、人民出版社、一九九九年、八三頁。

〈10〉 王林平・高雲湧「用科学的教学互動激發思政課課堂活
力」『中国大学教育』二〇二〇年第一期参照。

〈11〉 秦月・譚麗瓊「短視頻教学法助力高校思政課學生滿意
度的提昇」『新聞愛好者』二〇二二年第六期、範小青「網
絡時代紅色資源在高校思政課中的応用」『学校党建与思想
教育』二〇二二年第六期、常城・李慧「智慧教学軟件在思
政課教学中的応用」『学校党建与思想教育』二〇二一年第
二期参照。

〈12〉 『後浪』とは、新しい中国語で、本稿では若者を指す。
中国では、「長江後浪推前浪」（長江は後ろの波が前の波を
押し進める）ということわざで後輩が先輩を乗り越えて立
派になることを指す。

〈13〉 『後浪』 <https://www.bilibili.com/video/BV1FV41d7z7h>
[om=search&cid=7438677383228752657](https://www.bilibili.com/video/BV1FV41d7z7h) 二〇二〇年五月三
日。

〈14〉 「咬文嚼字」公布二〇二〇年度十大流行詞「文匯報」
二〇二〇年二月四日。

〈15〉 田豊・林凱玄『豈不懷帰——三和青年調査』北京：海
豚出版社、二〇二〇年参照。

〈16〉 筆者が所屬する大学の学生の多くはこの部類である。

筆者が着任した際に、ある学生から筆者および担当教員に
一〇枚ほどの絵はがきを渡されたが、それはその学生が世
界中を旅し、世界中の景色をカメラに収めたものを絵はが
きにしたものであった。その学生は『後浪』に登場する青
年の特徴を持つていると言える。

〈17〉程猛『読書的料』及其文化生産——当代農家子弟成長叙事研究』北京・中国社会科学出版社、二〇一九年、黄灯『我的二本学生』北京・人民文学出版社、二〇二〇年参照。

〈18〉『或許、這才是大多數普通人的“後浪”』<https://www.bilibili.com/> 二〇二〇年五月六日。

〈19〉閆方潔『世俗化』与『崇高之殤』——從自媒体景觀看当代青年的双重精神図景』『中国青年研究』二〇一八年第三期、閆方潔・周穎嘉『從“網紅”与“網黑”的變奏曲看青年簡性發展態勢』『思想理論教育』二〇一九年第五期、閆方潔・陶瑞『新時代加強網絡愛國主義教育的思考』『思想理論教育』二〇二〇年第五期参照。

〈20〉胡德平『全媒体時代大學生意義世界的消解与重構』『思想理論教育』二〇一九年第九期参照。

〈21〉現代中国の教育の現状に批判的な見方をする文学作品には、大学生の思政課に対する懐疑的な心情が鮮やかに描き出されている。「大学の履修課程で最も多いのは何だろうか。もちろん思政課だ。それはなぜなのか。私にもまったくわからない。ただそれが伝統だからということだけは言える。思政課は大学の課程すべてに関係している。……

私たちには思政課よりも現実の生活のほうが重要なのだ。大学英语試験（CET）四級・六級や、PC検定初級の合格証明書を取得しなければならぬし、心理学や教育学の資格も取らなければならないのだ。梁衛星『成人之美』兮』廣州・花城出版社、二〇一〇年、二頁参照。

〈22〉河北省衡水市に建設される中学校と高校の寄宿制学校で、高いレベルの資質を備える教員陣と莫大な投資で保全される教育環境により、名門大学への進学率が全国一位となっているため、名門中学として名高く知られている。

〈23〉李醒東・崔夢恬『社会学視閥中的“超級中学”現象解析』『教育科学』二〇一六年第五期、楊東平・王帥『從“衡中模式”看基礎教育治理的困境与出路』『清華大學教育研究』二〇一八年第四期、郭叢斌・徐柱柱・張首登『超級中学——提高抑或降低各省普通高中的教育質量』『教育研究』二〇二二年第四期。

〈24〉公羊編『思潮——中国“新左派”及其影響』北京・中国社会科学出版社、二〇〇三年、許紀霖・羅崗等『啓蒙的自我瓦解——一九九〇年代以来中国思想文化界重大論争研究』吉林出版集團、二〇〇九年参照。

〈25〉『“打工人”一夜爆紅、在百般況味中找尋尊嚴』『紅星新聞』二〇二〇年一月二三日。

〈26〉『“打工人”這箇梗是怎麼火起来的？』『界面新聞』二〇二〇年一月二六日。

〈27〉陳竜『“数字控制”下的勞動秩序——外売騎手的勞動控制研究』『社会学研究』二〇二〇年第六期、李勝藍・江

立華「新型労働時間控制与虚仮自由——外壳騎手の労働過程研究」『社会学研究』二〇二〇年第六期参照。

〈28〉『地鉄上越来越多的年轻人開始說〈毛選〉』紅色文化網二〇二二年四月一八日参照。

〈29〉『校長會議記錄』（一九五三年二月四日）、北京市檔案館藏、檔案番号一—二二—一—一三参照。

〈30〉例えば、中国社会科学院訪美代表团「訪美觀感」内部發行、一九七九年、中共上海市教育衛生工作委員會党史辦公室編『我們的大学——上海高等学校改革發展軌跡及啓示（一九七八—一九九二）』上海浦江教育出版社、二〇一八年、七五—八五頁参照。

〈31〉龔祥瑞『盲人奧裏翁——龔祥瑞自伝』北京大学出版社二〇一一年、二八〇—二八一頁、北京市教育科学研究所編『清華附中簡史』内部發行、一九八七年、一〇〇頁参照。

〈32〉「河南考研輔導班老板芦雲鵬雇凶殺人案二審開庭」『北京青年報』二〇〇七年五月二四日参照。

〈33〉竹内好『日本とアジア』筑摩書房、一九九三年、四六九頁。

〈34〉竹内好「評伝——毛沢東」『中央公論』一九五一年四月号、一二七—一五五頁参照。

〈35〉中華人民共和国教育部「關於全面深化課程改革落實立德樹人根本任務的意見」二〇一四年三月三〇日。

〈36〉中華人民共和国教育部「關於全面深化課程改革落實立德樹人根本任務的意見」二〇一四年三月三〇日。

〈37〉中共教育部党组「高校思想政治教育工作質量提昇工程實施

綱要」二〇一七年二月四日。

〈38〉中共中央宣傳部・教育部「普通高校思想政治理論課建設體系創新計劃」二〇一五年七月二七日。

〈39〉教育部「新時代高校思想政治理論課創優行動」工作方案」二〇一九年九月二日参照。

〈40〉中共中央組織部・中共中央宣傳部・教育部「關於領導干部上講台開展思想政治教育的意見」二〇一五年七月二三日参照。

〈41〉中華人民共和国教育部發行「普通高等学校思想政治理論課教師隊伍培養規劃（二〇一三—二〇一七）」二〇一三年六月二五日。

〈42〉中共中央宣傳部・教育部「普通高校思想政治理論課建設體系創新計劃」二〇一五年七月二七日参照。

〈43〉習近平「思政課是落實立德樹人根本任務的關鍵課程」『求是』二〇二〇年第一期。